

帷子川下流域の再生に向けて ～エキサイトよこはま22（横浜駅周辺大改造計画）～

横浜市都市整備局都市再生推進課 課長補佐 渡邊 伸郎

1. はじめに

帷子（かたびら）川は、横浜市内に源流を發し、途中で中堀川、今井川などの支川を合流し、下流では石崎川、新田間川等を分合流して横浜港に注ぐ、延長約17.3kmのヨコハマの河川である。下流域である横浜駅周辺では、国際化への対応・環境問題・駅としての魅力向上・災害時の安全確保などの課題を解消し、「国際都市の玄関口としてふさわしいまちづくり」を進めるための指針として横浜駅周辺大改造計画（以下：エキサイトよこはま22という）を有識者・地元・事業者・関係行政機関などと議論を重ね、概ね20年後のあるべき姿を探りながら平成21年に策定している。この計画の中で、帷子川に関連する取り組みを紹介する。

2. 帷子川下流域の変遷

（1）埋め立ての歴史

帷子川下流域は、江戸時代末期は湿地帯や海であった。明治5年、新橋～横浜間に鉄道を敷くための平沼堰堤が築堤され、この一体は内海となると、明治時代から大正時代にかけて、鉄道開発、石油・ガス会社などの工場誘致のための埋め立てや関東大震災後の石積護岸を築造、川沿いの産業発展のための派川の整備も行われてきた。近年においては、新田間川の一部を埋め立てることにより、横浜駅西口駅前広場が造成された。



図一 昭和初期の横浜駅周辺

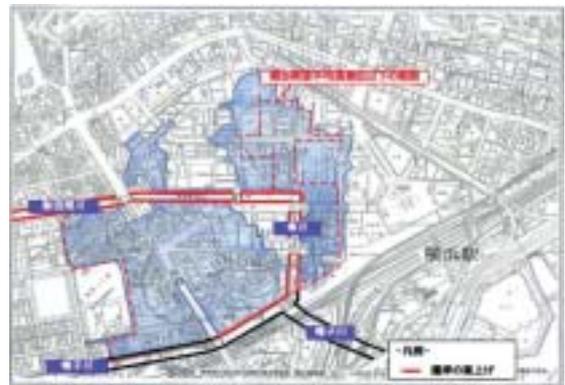
（2）帷子川の災害

帷子川流域は、昭和30年以降、流域の都市化が急速に進み、洪水時の氾濫原であった低地部にも住宅が立ち並ぶようになった。

昭和33年の台風22号（狩野川台風）は、帷子川の河川改修を行うきっかけとなった。昭和54年10月台

風20号では、横浜港の満潮と重なったため、西区北幸から平沼にかけての一带で浸水したため、震災復興事業で整備された護岸前面に高潮護岸を整備した。高さは、朔望平均満潮位に高潮による水面上昇を加えたため、周辺地盤よりも高い、いわゆるカミソリ護岸となり、人と川が分断されることになった。

直近では、平成16年10月に横浜に接近した台風22号により、横浜駅西口周辺では、飲食店、百貨店等の地下施設に浸水し、一部の店舗では浸水が天井まで達する被害が発生しており、今では図一2に示した赤色の範囲では、護岸の嵩上げを実施している。



図一2 平成16年の浸水域と護岸嵩上げ状況

3. エキサイトよこはま22

帷子川下流域は、新田の流路や運河として使用してきたため、地盤と水面との差を小さく築造されてきた。しかし、帷子川の浸水被害ごとに、まちの防御性を優先してパラペット方式となった。さらに、川を利用する産業もなくなったことで、川との距離がますます遠くなり、市民には「危ない・汚い・臭い」イメージのみが先行して、帷子川の存在は多くの人々に忘れられることとなった。

こうした状況の中、エキサイトよこはま22は、まちづくりと一体となった帷子川の浸水対策など治水安全度の向上及び新たに魅力ある親水空間の創出を目的として、その基本方針を導くための技術的な検討・意見交換を行っている。

横浜駅周辺は、地下街の発達や高度利用されたた駅直近部の特性があり、一旦浸水した場合の被害が甚大となる恐れがある。その一方で、河川空間がまちの地域資源として認知されていないこと、堤防によるまちと川の分断や川に背をむけた土地利用など親水性が欠如している課題がある。

計画の中では、横浜駅周辺にふさわしい治水対策と魅力ある親水空間を創出するため検討を進めており、治水安全度を確保する方針としては、外水は、50年に1回程度の82mm/hr降雨への対応とすること、内水は、地下街など高度利用されている横浜駅西口付近において30年に1回程度の74mm/hrに対応するためのルールを設け、今後10年以内に進めていく計画を定めている。さらに、一定規模の民間開発についても敷地内に貯留することや地盤を嵩上げていくことをガイドラインに定めていく。

また、まちの賑わいを感じられる親水空間創出に向けては、再開発にあわせたセットバック等により新たな河川沿いの空間や地区特性に応じて、河岸的な親水空間・遊歩道等の整備、海と川をつなぐ水上交通の検討を進めている。

セットバックについては、河積が増えること、階段護岸とすることで水面と近くなること、水上交通の拠点とすることなど治水対策にあわせて親水空間を生み出す相乗効果もある。



図-3 水辺空間のイメージ図

しかし、土地の高度利用を行っている横浜駅周辺において、セットバックに伴い親水空間を創出するのは必ずしも容易でないことに加えて、水上交通を実施するには、橋梁の桁下と水面との離隔がなく、帷子川を周遊可能な船舶の仕様が限定されるなどの課題がある。

4. 水面利用の社会実験

帷子川にて、防災や親水活動を行い、多くの市民に水辺空間の役割や魅力について認識してもらい、地域の活性化に資するために、既存の階段護岸と平成23年11月に設置した浮き棧橋を活用した、社会実験を行っている。これまで、水難救助訓練、シーカヤックによる周遊、屋形船を利用した東京・横浜間での航路の確認と階段護岸への接岸確認、河川視察・水質調査などの調査拠点として活用を行っている。

写真-1は、浮き棧橋を活用した水難救助訓練を実施した模様である。昨年6月に近くの川で男性が転落し、助けようとした警察官が水死された痛ましい事故が発生した。その後も川への転落事故は絶えない状況が続いていることから、警察・消防署とともに訓練を実施している。1日約11万人が通行する南幸橋周辺であることから注目を集めた。また、今年6月には、地元関係者も含めた水難救助訓練を実施したところである。今後ともこれらの活動を通じて安全への認識を高めていきたい。



写真-1 水難救助訓練



写真-2 接岸状況



写真-3 周遊状況

想定されている首都直下地震が発生した場合、東京と横浜との被害状況には差が予想される。河川や運河の多い地域では、津波の心配がないという前提で、帷子川のような水路が役に立つ可能性があるが、大きな船は、運行や接岸できないといった事態が予測されることから、不定期である東京と横浜間を、屋形船などで往復して帷子川の階段護岸に接岸できることを確認するとともに、平時の定期便への可能性も探りたいと考えている。

5. おわりに

そのむかし、人間の歴史が川のほとりから創生してきたように、川には人の営みの原点がある。帷子川が、地域の貴重な資源であることについて様々な取り組みを通じ市民意識の醸成を図っていきたい。

その認識は、地元の事業者や多くの皆様との議論の上で構築されるものであり、引き続き関係各位のご協力をいただきたいと考えている。